

乱れる刈萱

——『夜の寢覚』における植物の比喻について——

赤 迫 照 子

はじめに

「¹」誰とはなく、ゆくりなきほどのことはいひながら、秋の風に吹き乱るる刈萱の上の露乱れ散りつらむ気色したりつる²」
らうたさはまじ思ひ出でらるるに、涙ぐまれて…

(巻一・四三〜四)

『夜の寢覚』、男君が先夜契った女君を想起する条である。男君は女君が但馬守の三君だと誤解していた。そこで但馬守の三君に言い寄ったと噂のある宮の中将を呼び、その時の事を語らせる。宮の中将によれば、但馬守の三君はどうも物馴れた様子で男に返歌をするような女性らしい。おかしい、私が逢った女はそんな事はできそうにない、突然だったから当然だろうが、それにしても彼女はまるで「秋の風に吹き乱るる刈萱の上の露乱れ散りつらむ気色」だった。男君はふと疑念を抱いたものの、女君の追憶にひたってしまい、結局深く追求せずじまいであった。

「秋の風に吹き乱るる刈萱の上の露乱れ散りつらむ気色」——二重傍線部のように「乱る」が繰り返され、男君(「秋の風」)に抗えず、涙(「露」)にくれる女君(「刈萱」)の様子を描いた表現である。秋の七草の一つ刈萱は、物語にはあまり見られない。なぜ女君は刈萱によそえられたのだろうか。本稿では『寢覚』の刈萱の比喻にこめられた意味を掬い取ってみたい。

一 刈萱の美

刈萱は、和歌においては「まめなれどなにそはよけく刈萱の乱れであれどあしけくもなし」(『古今』雑体・一〇五二・読み人知らず)、「行く秋の風に乱るる刈萱はしめゆふ露もとまらざりけり」(『源順集』・一五三二)、「乱れたる名をのみそたつ刈萱のおく白露を濡れ衣にして」(『大式三位集』・四二)のように「風」「露」「乱る」と共に詠まれる例が多い。

三代集には右にあげた「古今」と、物名歌に用いられた『拾遺』(物名・三六七・壬生忠岑)の二首がみられ、『古今六帖』には「刈萱」の項目がみえる。歌題にもなっており、古くは「本院左大臣家歌合」の例がある。「東院前裁合」にも出題され、『枕草子』「草の花は」段にもその名があげられており、刈萱が秋の前裁には欠かせない草花の一つとして賞美されていたのがうかがえる。

先述のように、物語には特に目立ってあらわれないが、堤中納言物語『はなだの女御』に『寢覚』同様、刈萱を女性の形容に用いた

例がある。

〔2〕①七の君、「刈萱のなまめかしきさまにこそ、弘徽殿はおはしま

せ」
(四七三)

②七の君、「したり顔にも、

刈萱のなまめかしきの姿には

その撫子も劣るとぞ聞く」
(四七六く七)

七の君の主人「弘徽殿」のモデルには、一条帝女御、藤原公季女義子が想定されている。義子は刈萱のように「なまめかしき」風情の女性だったのだろうか。それはさておき、井上(米田)新子氏が指摘されたように、「『はなだの女御』では「みな人もあかぬにほひ」(四七八)を湛えた女郎花が「撫子・刈萱・菊の相互の競いあいから一歩抜きんでた扱いがされている」ようである。『はなだの女御』において、刈萱はその「なまめかしき」姿を賞賛されながらも、女郎花よりは下に置かれているのである。

二 『源氏物語』の刈萱

『源氏物語』にも、刈萱は一例しかない。

〔3〕
風騒かぜさわぎむら雲うらまがふ夕ゆふにも

忘るる間なく忘れぬ君

吹き乱れたる刈萱につけたまへれば、人々、「交野の少将は、紙の色にこそととのへはべりけれ」と聞こゆ。「さばかりの色も思ひ分かさりけれや。何処の野辺のほとりの花」など、かやうの

人々にも、言少なに見えて、心解くべくもてなさず。

(野分 三・一四二)

夕霧が紫の薄様に雲居雁への文をしたため、それに刈萱をつけていたところ、明石の姫君付きの女房達から、紙と刈萱の色合の不調和を咎められた場面である。夕霧詠の「忘るる間なく忘れぬ君」とはもちろん雲居雁である。しかしこの時、夕霧は六条院の女性達、特に紫の上の美しさに動揺しながらも、何もなかったように振る舞わなければならぬ状況にあった。

このような精神的な抑圧を鑑みれば、雲居雁への文は、禁じられた紫の上への恋の代償行為と読めなくもないだろう。「忘るる間なく忘れぬ君」は夕霧自身も気づかないまま、雲居雁と同時に「心にかけて恋しと思ふ人の御ことはさしおかれて、ありつる御面影の忘れぬを」(二二八)とある紫の上をも指しているのではないか。

小学館新編日本古典文学全集は、夕霧歌は「まめなれどよき名も立たず刈萱のいざ乱れなむしどろもどろに」(『古今六帖』第六・刈萱・三七八五・読み人知らず)が念頭にあり、「あなたと寝ておもしろい乱れてみたい、の意をにおわせた」(二八三)と注する。奥にこめられた、刈萱のように「しどろもどろに」乱れたいという欲求もまた、紫の上に向けられてもいよう。野分の中の刈萱の如く、夕霧は紫の上の強烈な印象に心をかき乱されているのである。

和歌や『源氏』をみると、思い乱れている自分を乱れた刈萱の姿に重ねるといふ用い方が、ある程度パターン化していたようにうか

がえる。その点、『はなだの女御』は「乱れ」という心象にひきつけず、植物としての刈萱の美があるがままとらえて「なまめかし」と評価を与え、女性の美の形容に用いており、和歌や『源氏』とは趣向が違うといえよう。ただし、先述のように、それでも刈萱がとりわけ評価されている訳ではない。

三 『夜の寝覚』の刈萱

以上のように見てみると、当時、刈萱は風や露に乱れた姿を愛でられてはいたが、如何せん派手ではないため、とりたてて賞賛する程の存在ではなかったことがうかがえる。それをふまえた上で、「1」の前後の文脈を検討し、刈萱の比喩を読み解いてみたい。

「4」萩重ねの紙に、

漏るからに浅さぞ見ゆるなかなか

いはでをやみね岩垣の水

墨薄く、ほのかに紛らはして。「あてやかに書かれたり」と、見たまひて、内に参りたまへれば、中宮の御方に上渡らせたまへるほどなれば、女房たち、つねよりも化粧じ用意して、色々の単衣襲、裳、唐衣、秋の野花を折りつくして、三十人ばかり、えもいはずもてなして、ここかしこにうち群れて居たるを、例はさしも目とまらぬを、今日は心とどめて見渡したまふに、ひとしき際、はた知らず、うちとけたるほどやいかがあらむ、化粧じいとみたるもてなし用意したるさまどもは、とりわき悪し

と見ゆるなく、またいとかたちある名高くののしり、宮、いとよき人におぼしたる人々もあり。「見るに、すべて、ほのかなりし月影になすらふべきそなきや。あさましくも、目もあやなりしかな」と、心にかけて思ひくらべたまふ。

(巻一・三九〇四〇)

「萩重ねの紙」に「あてやか」な手跡―返事が来るまで「久しく待たれ」はしたが、大君はおよそ非の打ち所がない女性らしい。だが男君は大君に興味はない。それよりも先夜の女性(「女君」)を中宮付きの女房にし、愛人にする計画を進めようと中宮の許に参る。そこには念入りに化粧し、装いに凝り、まるで「秋の野花をおりつくし」たかのような女房達がいた。波線部のごとく今日に限ってはい彼女達に目がいつってしまうのは、女君が中宮の女房クラスとしてはどれ程なのか、値踏みしたいからである。

男君は女君が但馬守の娘だと勘違いしていたので、契った時、「直々しきあたりに我まだきに知られじ」(三三三)と体裁を氣にして宮の中將を騙った。その後、女君への恋しさのあまり、いっそ自分を明かして但馬守邸に通おうかとも考えるが、やはり但馬守側から大仰に騒がれるのは恥ずかしい。他にも「1」「4」の前後には例えば「世の聞き耳のいとほしきに」(三六六)、「いと音聞き軽々しう、便なかるべし」(四六六)のごとく、身分の差にこだわり、慎重な姿勢をとる男君のありかたが繰り返されている。

男君は中宮の女房達と女君との間に美質の格差を感じていながら、

女君が受領風情の娘だと信じて疑わなかった。女君を誤認したまま、あくまでも身分差にこだわり、女君を中宮の女房にさせて体裁を整えようと企む男君には、女君を「秋の野花」（＝中宮の女房）の範疇でしかとらえられなかったのである。つまり「1」の刈萱の比喩は、男君の身分へのこだわりが反映された表現だと考えられるのである。

具体的に両場面の対応をみてみよう。「4」の二重傍線部のように約三十人もの女房が念入りに「化粧じ」「用意し」、豪奢に着飾っているながらも、男君から「秋の野花」と一括りにうちやられているのに対し、「1」では「刈萱」と具体的な草花の名称があげられ、また二重傍線部のごとく「乱れ」が強調されている。この両場面の呼応は、繕いの美に対する「乱れ」の美の発見であるとともに、「秋の野花」の中で際立つ「刈萱」の美の賞賛なのである。『寢覚』は受領階級という枠組みの中で女君をとらえてしまった男君の錯誤ぶりをさらしつづ、同時にあまりとりたてられる事のなかった、乱れた刈萱の美をそれなりにとりあげて讀えていよう。

男君が自分の誤解に気づき、事情が明らかになった後、「我がことや花のあたりにうぐひすの声も涙も忍びわびぬる」（二一〇）と女君は男君から桜によそえられている。但馬守の娘から源氏太政大臣の次女で、妻の妹へという男君の女君への認識の変化に対応するかたちで、植物の比喩も、秋の草花の一つに過ぎない刈萱から、花の王者で、禁忌の恋の象徴でもある桜へと大きく変わっていくありかたにこそ、目が向けられるべきなのかもしれない。

河添房江氏は、『寢覚』では「場面の時と花の季はほとんど例外なく一致し、をりの美学につらぬかれている点では、『源氏物語』と趣を異にするのである。それを裏返せば、花の直喩があくまで女君達を当座的に賞揚するレトリックにとどまり、個性の描き分けや主題的表現という面でははなはだ心許ない、ということであろう」とされ、「1」の刈萱の表現を、逢瀬の場面でも女君のありようを醜化した『寢覚』固有の花の喩の転用」とされた。確かに「1」は『寢覚』の植物の比喩の成果の一つであろうが、みてきたように『寢覚』なりに物語内部の問題と連繋するよう工夫した跡もつかえ、一口に「当座的」と切り捨てる事はできないのではないかな。

もう一つ『寢覚』の植物の比喩の例をあげてみよう。

もう一つ『寢覚』の植物の比喩の例をあげてみよう。
[5]①人がら、ささやかにそびえて、あえかに、身もなく衣がちに、あてにらうたげに、このころのしだり柳の心地して、いとにくからず、あはれと御覧じながら、…（巻三・二四八）

②やうやう生き出でつる命、絶えぬる心地して、このころのしだり柳の、風に乱るるやうにて、さすがにいと執念くて、靡くへくもあらず。（同二八〇～一）

傍線部のように、①督の君と②帝を拒む女君とに全く同じ形容がされている。督の君は「このころのしだり柳」を思わせる点で、なんとなく女君と似てはいた。女君と血縁関係にない督の君が、帝から女君の「草のゆかり」（同二七九・三〇九）とされるのは、このためであろう。ただし同時に、督の君が女君の「ゆかり」たりえないこ

とも鮮明に示されてもいる。波線部のような心強さは、督の君には付与されていないのである。

このように同じ植物の比喩を用いて女君の優位性を確立していくやり方は、両者の差異が明確で解りやすいが、表現の反復は文章の成熟度としては高くないだろう。「5」は『寢覚』の限界が露呈した表現といえないだろうか。¹⁾

結

一見、ただ四季になかった美の表現を目指しているかのように見受けられるが、実は『寢覚』なりに物語の展開と連関した表現を求めて、もがき苦しんでいたかのように感じられる。『寢覚』の表現のありかたが、物語文学史的位相としてどのように位置付けられるのか。本稿ではそれを考える一つの手掛かりとして、刈萱の比喩について検討を試みた。創造への意欲と境界の狭間で揺れ動く『寢覚』の苦悩を垣間見たような気がするのである。

〔注〕

(1) 『夜の寢覚』本文の引用は小学館「新編日本古典文学全集」(鈴木一雄校注・訳)によったが、一部表記を私に改めた。なお、末尾の(一)内に巻・頁数を付記し、注記・符号・傍線部等を私に付した。以下同じ。

(2) 小学館「新編日本古典文学全集」には「吹き乱る」とある。だ

が、ここは「秋の風に吹き乱れる刈萱」と意味をとらなければ通じない。小学館「新編日本古典文学全集」では特に校訂がされていないが、ここは他動詞二段活用 of 連体形「吹き乱る」ではなく、自動詞下二段活用の連体形「吹き乱るる」の誤写ととるべきではないだろうか。

(3) 和歌における刈萱については、久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』(角川書店 平11)「刈萱」の項を参考にした。

(4) 和歌の引用は『新編国歌大観』によったが、表記は私に改めた。

(5) 堤中納言物語『はなだの女御』本文の引用は「新編日本古典文学全集」『落窪物語 堤中納言物語』(三谷栄一・三谷邦明・稲賀敬二校注・訳)によった。末尾の(一)内に頁数を付記し、注記・符号・傍線部等を私に付した。

(6) 『はなだの女御』で草花に喩えられる各女性のモデルを想定した論は山岸徳平氏『堤中納言物語註解』(昭41 有精堂)、都竹裕子氏『堤中納言物語「はなだの女御」考—左右大臣該当者への一思案—』(『国文目白』第18号 昭53・2)、井上(米田)新子氏『堤中納言物語「はなだの女御」の執筆意図—モデル探求及び草花による比喩の検討を通して—』(『国文学攷』第134号 平4・6)があるが、いずれの論でも「弘徽殿」は藤原義子とされている。

(7) 前掲(6)論文。井上(米田)新子氏は、『はなだの女御』の作者が、女郎花に喩えられた「右大臣中君」のモデルで小一条院に

遇した藤原顕光女延子を賞揚し、道長方の栄華の犠牲になった
顕光・延子親子の鎮魂を図った可能性を提示されている。

(8) 『源氏物語』本文の引用は「新潮日本古典集成」(石田穰二・清水好子校注)による。末尾の()内に巻・頁数を付記し、注記・符号・傍線部等を私に付した。

(9) 他に、物語における刈萱の例は改作本『海人の刈萱』(左の引用は、笠間書院「中世王朝物語全集」2(妹尾好信校訂・訳注)による)にもみられる。

秋の野の乱れて露の結びたるを眺め出だし給ふに、刈萱のそよそよとするに、

ともすれば風に乱るる刈萱の

しどろもどろにもぞ悲しき (巻三・一四四)

この例も、『源氏』と同じく『古今六帖』三七八五歌「まめなれど…」を「念頭に置く」(一六〇)と注されており、藤壺女御が自身の心の乱れを刈萱によそえたものである。

(10) 女君の桜の比喩については拙稿『夜の寝覚』の「鶯」―『源氏物語』引用の方法の一断面―(『古代中世国文学』第16号 平12・12)で検討を行っている。

(11) 河添房江氏「源氏・寝覚の花の喩」(『源氏物語の喩と王権』有精堂 平4・11)。

(12) 督の君が女君の血縁ではないのに「草のゆかり」とされている問題については宮下雅恵氏『夜の寝覚』論―反(ゆかり)・反

〈形代〉の物語」(北海道大学『国語国文研究』第111号 平11・3)が論じられている。

(13) 『寝覚』では、例えば「1」の「乱れ」、「4」の「化粧じ」、「用意し」、「凝り合ひて」(巻一・五九)のように、同じ表現を繰り返し、す事で読者に注意を促すというありかたが見てとれる。

―あかさこ・しようこ、広島大学大学院博士課程後期在学―